

教職支援室との協働による教職キャリア形成の検討(2)

迫田 孝志 [鹿児島大学教育学系(教職大学院)]

森藤 悦子 [鹿児島大学教育学部(教育心理学)]

青木 利博 [鹿児島大学教育学部教職支援室]

Collaborating with the teaching support office to examine careers in the teaching profession (2)

SAKODA Takashi, MORIFUJI Etsuko and AOKI Toshihiro

キーワード：教職支援室、キャリア教育、教職キャリア、自主学習会、ソーシャル・サポート

1. はじめに

大都市圏における教員の大量退職、大量採用の時期は過ぎたが、地方の自治体では、小学校教員を中心として数年前から教員需要が増えつつあり、小学校教員でも10倍を超えていた鹿児島県の教員採用倍率が令和3年度の採用試験では、3倍を切るまでになった。

教員養成を行う大学側からすれば、教員を志望する学生の進路実現に向けて今こそ積極的な支援が必要になっていると認識し、学部や大学院の教員が教職支援室と協働して学生の教職キャリア形成を推進すべきであると考えます。

迫田・森藤・青木(2020)は、教員志望学生の教職キャリア形成について教職支援室の活動を中心に報告したが、本稿では、第一筆者が実施している自主学習会と教職支援室の協働という側面から検討したことを報告する。

2. 第一筆者と教職支援室との連携

第一筆者は、鹿児島県内の小学校、中学校、教育委員会等で勤務していたが、鹿児島県教育委員会と鹿児島大学教育学部との交流人事で平成25年度～平成27年度の3年間、鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター教職研究部門に勤務し、平成28年度～平成29年度は鹿児島市内の公立中学校長として定年退職まで2年間勤務した。その後、平成30年度から鹿児島大学教職大学院の実務家教員として在職中である。

2.1 教職支援室の利用促進

第一筆者が教育学部附属教育実践総合センターに着任した平成25年度当時、鹿児島県の教員採用状況は極めて厳しく、小学校でも約10倍、中学校、高等学校では教科によって異なるが、10数倍～20倍を超える試験倍率であった。

教育学部も教員採用状況の厳しさを認識し、教育学部生の教員就職率の向上を目指して、理論と実践の往還を目指す正規カリキュラム外にも様々な取組を実施していた。例えば、履修カルテを基

にした専修ごとの学生への日常的な支援に加え、就職委員会による「教員採用試験対策プログラム」「面接対策講演会」「教員採用説明会」、全学就職支援センターによる「面接対策講座」、教育学部学生係前の就職・教職支援コーナーの充実、平成19年度に開設された教職支援室における相談・教員採用対策支援活動の推進などである。

特に、図1に示すように教職支援室については、第二筆者が平成25年度途中から教職支援室の特任専門員となり、教職支援室のPR、相談活動及び教員採用対策支援活動を積極的に展開したことにより、平成26年度からのべ利用者数の増加が顕著となった。さらに第三筆者が平成30年度から特任専門員となり、これまでの相談活動及び教員採用対策支援活動に学生相互による学習会機能を加えたことによって、教職支援室のべ利用者を大幅に増加させることに繋がっている。

第三筆者が教職支援室において学習会機能を付加した背景には、増え続ける支援希望者への対応を一人の特任専門員で効果的に行うためには、支援希望者の支援内容によってグループ化することが必要であるとの認識と第一筆者が実施している自主学習会での学びが、教職キャリア形成には必要であるとの認識からである。筆者ら3人が同時に勤務する体制になった平成30年度からは、学生の相談、自己申告書作成、集団討論や模擬授業等への対応方法などについて、筆者らは、顔の見える日常的な連携・協働の取組を行い、互いの相談活動や自主学習会の様子を相互参観することもあった。自主学習会の中で参加学生が、資料に基づいて考えたり相互に意見交換したりする活動が、個別の相談活動では深められない多面的・多角的な対話を促し、教職キャリアはもとより教職への動機づけを高めている様子を具体的に確認できたことで、第三筆者は教職支援室での支援活動にも学習会機能を導入することとした。

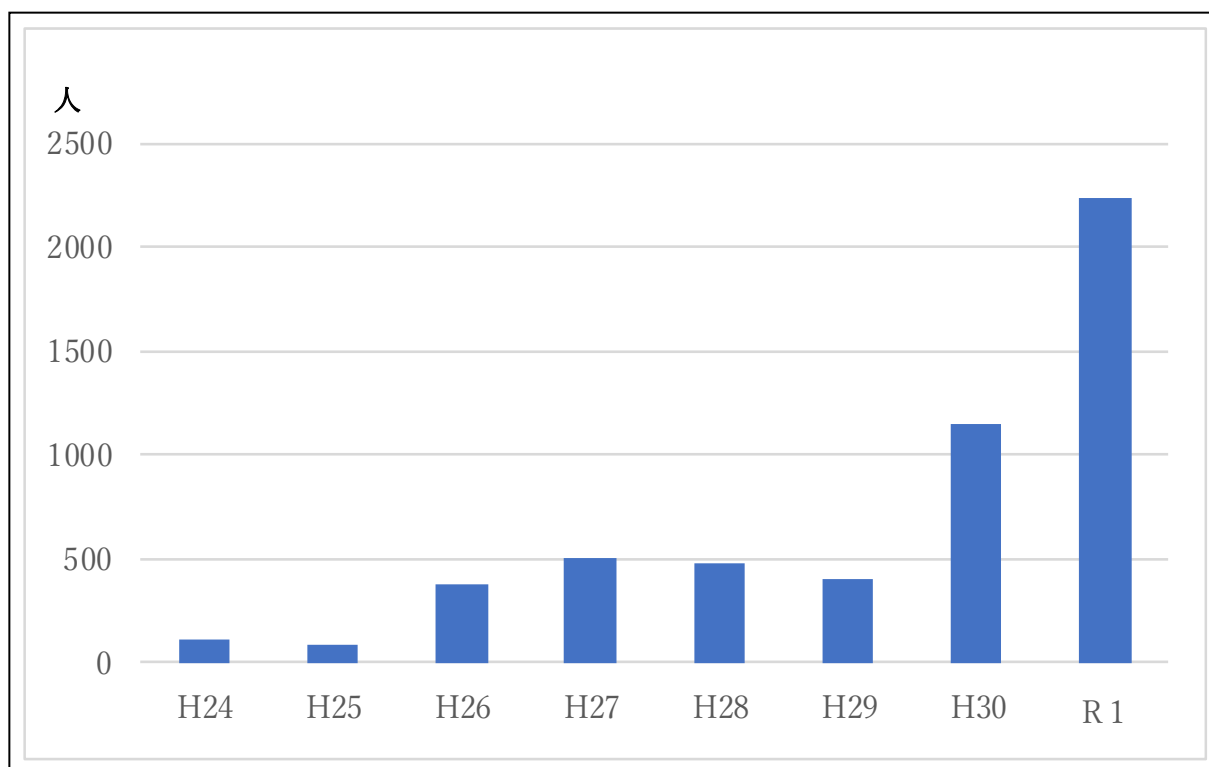


図1 教職支援室年間のべ利用者数

2.2 学部教員の教職支援室の理解促進

第一筆者は、常々、教職支援室の特任専門員が教育学部の教職員に対して教職支援室の現状報告を直接行うことの必要性を感じていたが、教育学部学生生活・就職委員会委員長や学生係の働きかけにより令和元年7月の教育学部学生生活・就職委員会でその機会が実現した。迫田・森藤・青木(2020)は、「教職支援室の機能、場所、担当者、相談及び指導・助言の内容、のべ利用者数等について学生生活・就職委員会の委員に直接情報提供を行うことができたことは、教職支援室の理解促進及び学部教員と教職支援室の連携の基盤となり、学生の教職キャリア形成や進路実現に向けて大きく前進するのではないかと期待している。」と紹介している。

令和2年度は、前年度末からの新型コロナウイルス感染拡大防止対策のために対面による学生指導ができない状況下で新学年がスタートしたため、教職支援室も機能を停止せざるを得ない状況であった。4月の教育学部就職委員会（令和2年度から学生生活・就職委員会が分離し、別組織の委員会となった）において、第三筆者が令和元年度の実績報告と教員志望学生への支援が思うようにできていない現状を説明したことにより、大学全体で活用することになったオンラインによる指導形態の導入を就職委員会からも要望することになり、5月の連休明けから教職支援室もオンラインでの指導が可能となった。また、毎年学生生活・就職委員会が編集してきた「教員採用の手引き」の2019年版は、第一筆者及び第三筆者も加筆・修正を加え、内容充実に協力した。これらの事例は、教育学部教員が教職支援室の機能と特任専門員の役割について理解を深めたことにより、連携が促進された好事例と言えよう。

3. 自主学習会実施の経緯

第一筆者は、教育学部卒業生の教員就職率の改善を図るためには、学生自身が意欲的に教職キャリアを形成しようとする動機づけを高めることが大切であり、長友・霜川ら(2016)の山口大学における教職キャリア形成の報告のように、正規カリキュラムが教職キャリア形成に及ぼす効果を検討し、教育学部全体での組織的な取組が必要であると考えているが、組織改革を伴わない個人的な取組としては、教職キャリアを高めるための自主学習会が実現可能ではないかと考えた。そこで、第一筆者自身が同窓会OBであり、教員間の連携を図りやすい心理学専修の学生を対象とした教職キャリア形成のための自主学習会について、平成25年当時の心理学科教員に打診し、第一筆者の業務に支障のない範囲での自主学習会実施の了解を得た。しかしながら、平成25年度以前は、教員以外の心理専門職を目指して大学院進学や公務員を志望する学生も多く、教員志望者が少なかったため、自主学習会は実施できなかった。平成26年度は、当時教職支援室の特任専門員であった第二筆者との連携の下、教育実習終了後の10月から相談に通い始めた心理学専修の3年生や教員採用試験後も教職キャリアを高めたいと希望する学生が参加する自主学習会を不定期で実施した。平成27年度は、4月当初から心理学専修の教員志望4年生を対象とした自主学習会を定期的に変更し、後期には4年生の学習会に3年生の教員志望学生も加わるようになった。第一筆者が鹿児島市の公立中学校に勤務していた平成28年度と29年度は、第二筆者及び心理学科教員とも連携を図りつつ、4年生対象の自主学

習会を土日、長期休業等を中心に継続した。平成30年度からは、平成27年度同様の形式で4年生は通年、3年生は後期から参加する形の自主学習会を実施している。年度ごとの参加者数を表1に示す。なお、令和元年度の教員志望の自主学習会参加者8名は、心理学専修1学年の約4割に相当する。

表1 心理学専修学生の自主学習会参加者数

年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
前期人数	0人	8人	8人	8人	8人	8人
後期人数	8人	16人	8人	8人	16人	14人

4. 令和元年度の自主学習会

令和元年度の自主学習会には、教員志望の心理学専修の学生のほかに大学院生、他専修・他学部、臨時的任用教員、卒業生等が年間合計でのべ2060人が参加した（図2）。

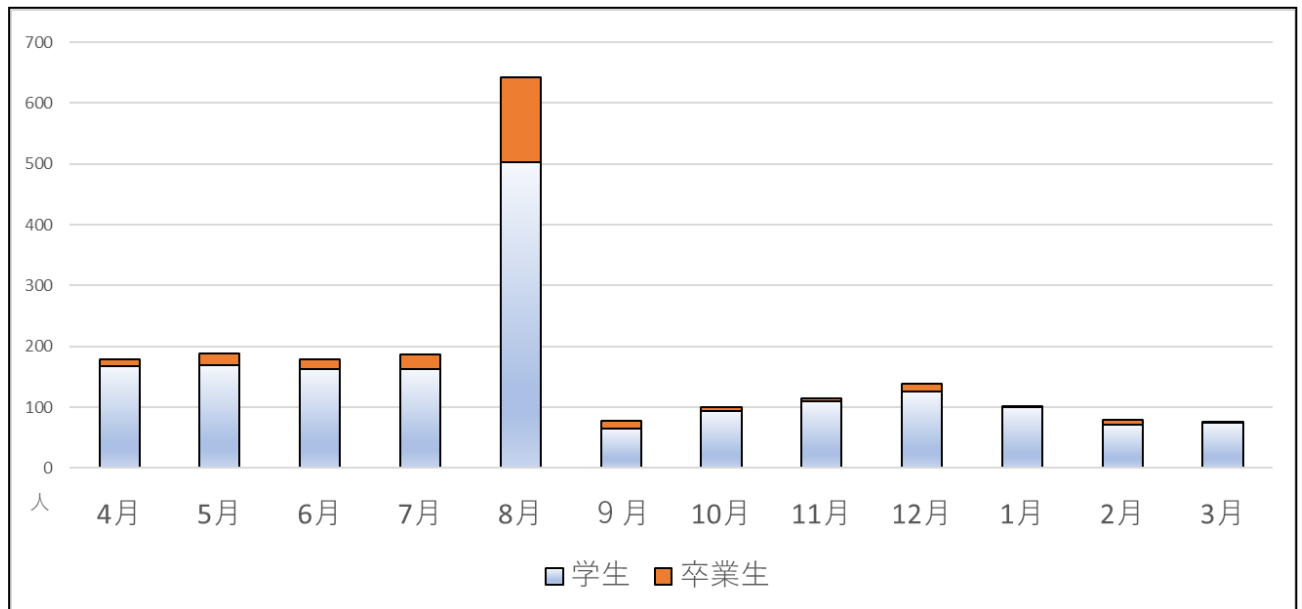


図2 令和元年度自主学習会月別のべ参加者数

図2の自主学習会月別のべ参加者数で、8月の参加者が突出しているのは、教員採用試験二次対策の自主学習会をほぼ毎日実施しているからであり、教職支援室の月別のべ利用者数の状況と同じ傾向を示している。卒業生の中には、教員採用試験二次対策を目的として参加した臨時的任用教員に加え、学生時代に自主学習会に参加していた正規採用後1～数年の若手教員等も含まれており、学校での実践報告や後輩の試験対策への助言のために毎年多くの卒業生が夏休み期間に参加している。

4.1 令和元年度心理学専修教員志望学生への支援

自主学習会は、基本的に心理学専修学生を中心に組織し、それに大学院生及び他専修・他学部の学生が加わる形で運営してきた。ここからは、令和元年度、自主学習会の中心メンバーである心理学専修の教員志望学生8人への支援とその効果について分析したい。

第一免許の教育実習が終了した平成30年10月以降、第一筆者、心理学科の第二筆者及び教職支援室の第三筆者は、相互に連携して教職キャリア形成のための具体的な支援を実施した。第二筆者は、心理学専修学生ゼミ室の向かい側に研究室があり、日常的に学生への声掛けや研究室での個別支援

を行い、第三筆者は教職支援室での個別又は少人数による相談、面接指導等を行った。第一筆者は、週1コマ心理学専修学生のための自主学習会の時間を設定するとともに土日等には専修、学部、大学院などの所属に関係なく専門の異なる学生や臨時的任用教員等が互いに学び合い、教職キャリアを高めることができるような自主学習会を開催した。

図2に示した令和元年度の自主学習会年間のべ参加者数2060人に占める心理学専修学生のべ参加者数は490人で、その割合は23.8%である。自主学習会への実参加人数57人に対する心理学専修学生8人の割合である14.0%を大幅に上回っており、心理学専修学生の自主学習会への積極的な参加状況が示されている。

表2は、令和元年度心理学専修の教員志望学生8人の自主学習会参加回数を示したものである。3年次は後期、4年次は年間を通じて学習会を継続した。各時期の主な学習内容は、表3に示す通りである。8人全員が常に一緒に学習会に参加できた訳ではなく、教職支援室の利用やアルバイト等との調整が必要となる土日の学習会への参加、受験自治体の二次試験の日程、他の採用試験対策講座の日程など学生個々でスケジュールが異なるため、参加回数には個人差が見られる。

二次試験対策が佳境であった8月後半には、面接や集団討論を数多く体験したいという希望もあったため、1日に3～4コマの学習会を設定し、複数回参加できるようにした。

表2 心理学専修教員志望学生の自主学習会参加回数

時期 学生	3年後期 10月～ 3月	一次試験対策 4月～ 7月上旬	二次試験対策 7月中旬～ 8月	4年後期 10月～ 3月	4年次 合計	総合計
A	6	13	10	15	38	44
B	15	32	28	21	81	96
C	17	32	35	17	84	101
D	13	24	24	21	69	82
E	12	28	32	17	77	89
F	9	27	27	16	70	79
G	16	28	25	18	71	87
H	9	13	7	16	36	45
平均	12.1	24.6	23.5	17.6	65.8	77.9

4.2 自主学習会の主な学習内容

表3は、令和元年度自主学習会の主な学習内容を示している。原田・森山ら(2014)の「自己成長を目指す教職実践演習テキスト」、東京都教育委員会(2013)の「小学校教職課程学生ハンドブック」等を参考に、4月～7月上旬は一次試験対策を中心に教師として求められる知識領域を可能な限り網羅し、7月中旬～8月は、面接、集団討論、模擬授業、教育時事などの二次試験対策と卒業生の実践報告や試験に対する助言などを盛り込み、10月以降は学級経営等の学校実務を中心に内容を構成した。

表3 令和元年度自主学習会の主な学習内容

期間	月	主な学習内容
一次試験 対策学習	4月	教職教養 一般教養 小学校専門教養 特別支援教育 教育時事
	5月	教職教養 一般教養 小学校専門教養 カリキュラム・マネジメント 教育法規 教師の主体性 教育時事
	6月	義務教育学校 キャリア教育 チーム学校 いじめ及び不登校 生徒指導(体罰と懲戒) 保健安全指導(AED、エピペンの使い方など)
	7月上旬	教育振興基本計画 いじめ防止対策推進法・基本方針 人権教育
二次試験 対策学習	7月中旬	一次試験の振り返り 自己申告書 集団討論 個人面接 模擬授業
	8月	自己申告書 集団討論 個人面接 先輩の実践報告・助言 教育時事
4年後期 学級経営 学校実務 学習	10月	教員採用試験振り返り 後期学習計画 学級経営案
	11月	構成的グループエンカウンター 特別支援教育 道德教育
	12月	保健指導 構成的グループエンカウンター 卒論紹介 学級経営
	1月	カウンセリングの考え方を生かした学級経営・学年経営・学習指導
	2月	進路指導 特別支援教育
	3月	学校に赴任する心構え

4.3 自主学習会の振り返り

自主学習会の終了時には、毎回学習を通して学んだことや疑問に思ったことなどを自由に記述して相互に感想を述べ合う振り返りの時間を設定した。8人全員の振り返りの内容をKH Coderを用いて作成した抽出語の共起ネットワーク図を図3～図5に示す。

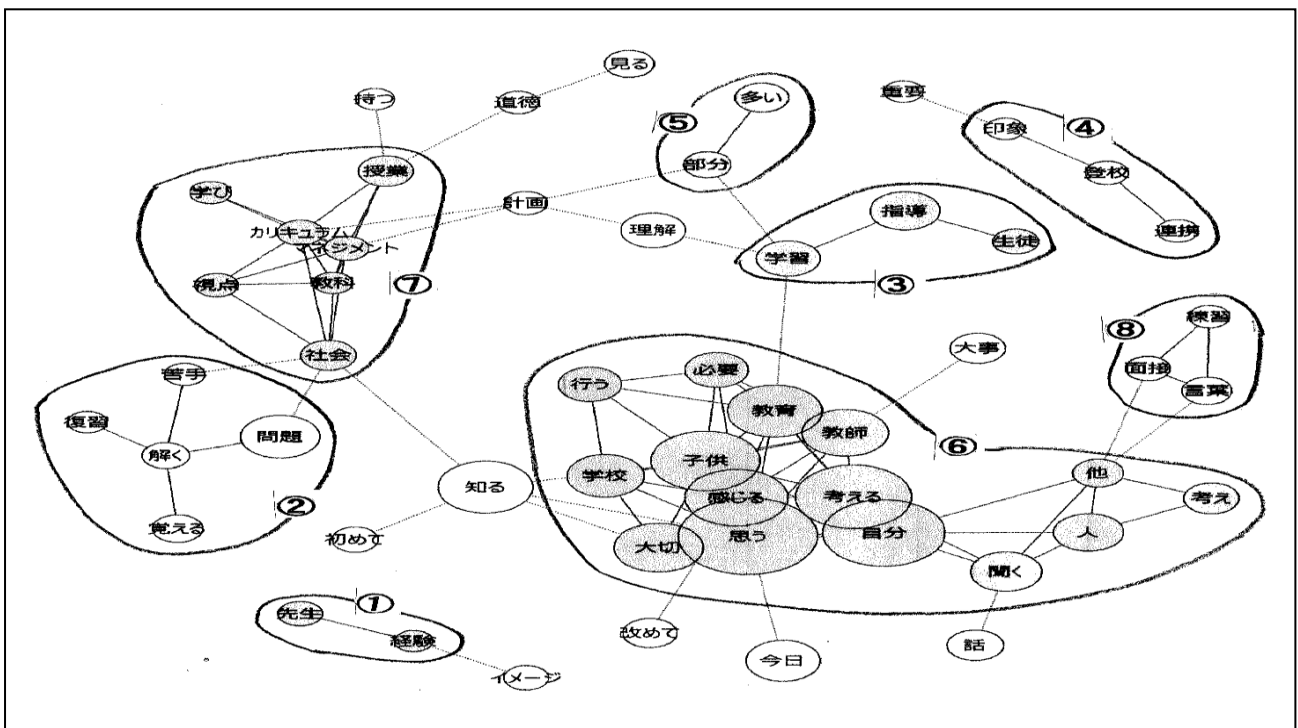


図3 4月～7月上旬(一次試験対策)学習会の振り返りの共起ネットワーク

く答えるためにどうすればよいかという二次試験に対する前向きな意識のまとまりが示されている。また、図中⑥の先輩の現役教師が多数学習会に参加して、実践報告をしてくれたことに対する感想もグループ化されており、教育実践の現状を知るよい機会となっているようである。

図5では、11個のグループが形成され、図中②の教師や子供に対する考えを深めていることとともに①の学級経営、③の構成的グループエンカウンター、⑤の特別支援教育などもグループ化され、学習会で学んだことを学校現場で実践できるように学びを深めていこうとする意識が示されている。

さらに、どの図においても他の人の考えを聞くことがつながっており、学習会を通して他者と一緒に学ぶことの意義やよさを認識していることが示されている。

4.4 教職キャリア形成支援の複数のソーシャル・サポート

筆者らは、教員志望学生の教職キャリア形成のために、それぞれが得意とする方法で学生への指導・助言に当たっている。心理学専修の8名の学生も第一筆者の自主学習会だけでなく第二筆者の面接指導及び第三筆者による指導・助言を並行して積極的に受けてきた。筆者らは学生を相互に紹介したり、必要に応じて情報交換を行ったりしてはいるが、個々の学生が、いつ、どこで、何を、どのように学んだかということまでは確認できずに日々の実践に追われているのが現状である。学生が必要な時に、必要な場所で支援を受けるソーシャル・サポートを提供する場を保証するためにも、複数の場所で支援を受けることのメリット及びデメリット、教員採用試験等への支援の充実策について学生自身がどのように考えているのか教員採用二次試験が終了した9月上旬に記述式の調査を行った。表4は、複数の場所で支援を受けることのメリット及びデメリットに関する学生の記述内容である。

表4 複数の場所で支援を受けることのメリット及びデメリット

○人生の先輩の考えを受けて自分のものにできる。
○様々な意見を聞くことができたので自分の中で取捨選択することができた。
○様々な立場から意見がもらえ、考えを深めたりお互いに高め合ったりすることができることがメリット。それぞれの場で学んだ事を結びつけられることがよい。
○教えてくださる方によって対策の仕方が異なったり、一緒に対策を受けるメンバーが異なることで、いろいろな意見が得られたりすることがメリットだと思う。
○様々な考え方を学ぶことができる。教員としての実際の経験を知ることができる。同じ教員を目指す仲間を見つけることができる。
○多くの先生方の考えを聞くことで様々な視点を取り入れることができ、さらにそれを活かして自分の考えを持つことができるようになる。
○異なる場所であれば学ぶことも変わってくる。
○いろいろな先生方の意見やアドバイスをうかがうことができる。同じ場で勉強する他学科の人達とのつながりができる。
●時間の確保（調整）で悩むことが増え、連絡調整の煩雑さで困ったこともあった。

学生は、指導を受ける教員によって指導の方法や内容が異なることをデメリットとしては考えておらず、サポート源が複数あることで、むしろ様々な考えを聞くことができ、自分の中で取捨選択できることなどをメリットとして捉えていることが分かる。さらに、自主学習会に参加する他のメンバーとのつながりができることやいろいろな意見が得られることなどもメリットとして捉えており、自主学習会参加者相互の学び合いのよさを実感していることも示されている。

一方、デメリットとしては、1人が指導時間の確保と、連絡調整の煩雑さで悩んだことがあったことを回答している。

次に、教員採用試験等への支援の充実策についての自由意見を表5に示す。

自主学習会での学びが教員採用試験対策だけでなく、教師としての在り方を考える貴重な場となるため、現役の教師の体験談を聞く機会の設定や一緒に学び合う仲間との交流機会を増やしてほしいとの願いが読み取れる。ソーシャル・サポートの一種であるピア・サポートは、安心して学習できる環境を作ったり、学習への動機づけを高めたりする効果があることはよく知られており、教員採用試験への挑戦という不安や緊張が増加する取り組みにおいては、一緒に学習する仲間の存在は、心強いものであることを示唆していると考えられる。さらに、自主学習会参加の心理学専修8人の内6人が鹿児島県の小学校教諭志望、2人が他の自治体（東京都、佐賀県）の小学校教諭志望であったこともあり、鹿児島県以外の教員採用試験を受験する学生への支援も手厚くしてほしいとの願いも示されている。

表5 教員採用試験等への支援の充実策

○大学での学びと教員採用試験内容が直結しない場合も多いため、教員採用対策のためだけとは言わないが、法規や答申に触れることがあるような授業や講話があれば、大学の授業と教員採用試験とのギャップに驚くことが少なく、スムーズに勉強にとりかかることができると思う。
○現場の先生のお話を聞く機会を設けたり、ボランティアにもっと積極的に参加したりすることが必要だと思った。
○県外の自治体を受験する人へのサポートの充実が一つあげられる。
○現場の先生のお話を聞く機会があると具体的な教師のイメージができ、より教師について詳しく知れるので、そういう機会があるとありがたいです。
○現役の先生からの経験談を聞くことができる場や年齢が近い先生とコミュニケーションがとれる場があるとありがたい。
○授業以外でも多くの志を共にする仲間と話をする機会や現職の先生方との交流（この自主学習会のようなもの）が多く行われれば、自分の教師としてのあり方を見つめられ、高めていけるのではないかと思います。
○平日は授業で予定を合わせられないことが多いため、土日等にも勉強会があるとありがたい。
○一次試験より二次試験の対策をたくさんしてもらえると、自信を高めることにつながる。

5 おわりに

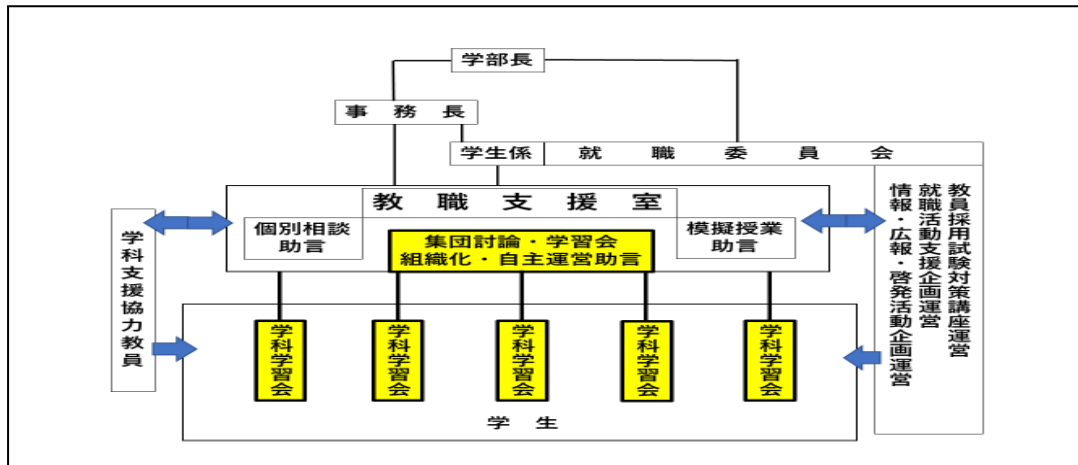


図6 学生の自主学習会を支援する体制の整備例

本稿では、これまで数年間継続して行ってきた心理学専修学生対象の自主学習会の実践について令和元年度の部分のみを取り出して分析した。それは、第一筆者が自主学習会を実施して6年目になって、やっと年間を通じて教職キャリアの形成を図る学習会を実現できたという思いがあったからであり、自主学習会に参加した8人の心理学専修の学生も3年生の後期から4年生の後期まで全員が一緒に学び続けることができたからである。表2に示した通り、自主学習会への最多参加者は101回の参加であり、8人の平均参加回数は77.9回である。15回2単位の講義であれば平均して10単位分の学習を行ったことになる。8人の中の2人は途中で受験自治体を変更するということがあったが、全員が目的を達成し、卒業と同時に新規採用教員として赴任することができた。

教員就職率の向上を目指して本学教育学部では、入試制度やカリキュラム、教育実習の改善をはじめ様々な取組を検討し実践してきた。本稿で報告した学科単位の学習会や面接指導もすでに取り組みはしているが、学部全体の教員就職率を大幅に向上させるまでには至っていない。今後は、図6に示すように教職支援室をキーステーションとして学生が相互のつながりを深め、自ら学習会を運営できるように、教職支援室と各学科の教員が一層連携して支援する体制を整えることで、学生自身の教員志望動機を高め、教職キャリアの形成促進を図る取組が実現することを期待したい。

参考文献

- 長友義彦・霜川正幸・高橋雅子・南浦涼介・藤上真弓・静屋 智・前原隆志 2016 「教職キャリア形成Ⅰ・Ⅱ」の現状と課題 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第41号 P21-P30
- 原田恵理子・森山賢一編著 2014 「自己成長を目指す教職実践演習テキスト」 北樹出版
- 迫田孝志・森藤悦子・青木利博 2020 教職支援室との協働による教職キャリア形成の検討 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第29巻 P218-P227
- 中央教育審議会 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf （最終閲覧日 2020.8.30）
- 東京都教育委員会 2013 小学校教職課程学生ハンドブック（平成25年度版）